

NPO 法人ウッドデッキ第三回シンポジウム報告

NPO 法人ウッドデッキ第三回シンポジウム「若者の『今』と『これから』を考える」は、2024年11月16日に横浜市立大学 金沢八景キャンパス YCU スクエアを会場として、現地参加とオンライン参加を使ったハイブリッド形式で開催された。若者の生きづらさの社会課題の解決に向けて、霊長類研究で「ゴリラ博士」として知られる山極壽一・総合地球環境学研究所所長による基調講演、横浜市を拠点に過干渉など子どもの問題の解決を進める NPO 法人「第3の家族」の奥村春香代表による講演、そしてパネルディスカッションの3部構成で展開した。現地会場に72名、オンライン視聴を含めて、大学生など115名の参加があった。今回は、横浜市立大学 COI-NEXT が設立した「Minds1020Lab」との共催で企画し、若者である20歳代以下の参加率は全体の34%と、高い割合となった。

開会の挨拶で、ウッドデッキ 渡辺美代子代表理事が「若者に求められる力は大きく、これから主要となっていくデジタル技術や世界共通言語とされる英語は若者の方が得意である。では、なぜ、今、若者が生きづらいのかを考えると、①我々シニアに比べ失敗・成功の経験が少なく、自分を活かす術を知らない、シニアとともに解消していく策があるのではないかと、②昨今、女性・LGBTの活躍が促進される中で、男性・男子がむしろ生きにくくなっている面もあるのではないかと述べた。



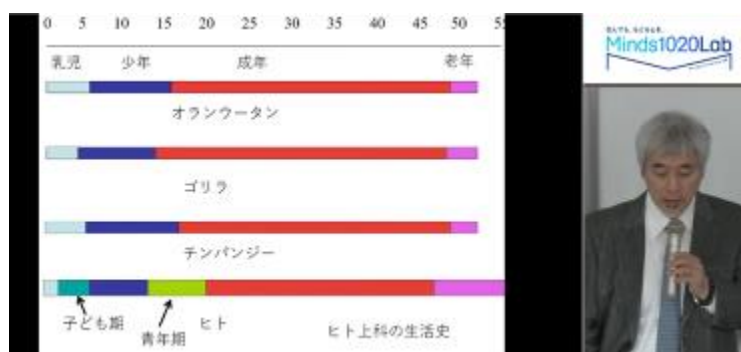
開会の挨拶：NPO 法人ウッドデッキ 渡辺美代子代表理事

続いて、ウッドデッキメンバー兼横浜市立大学 COI-NEXT 副プロジェクトリーダーである横浜市立大学の高瀬堅吉客員教授が、シンポジウム共催の背景と趣旨説明を行った。「若者に自分の心を大切にしてほしい。心の不調を可視化して、『未病』と呼ばれる時期からの早期ケアを行えるようにしていきたい」と本活動の意義を説明した。



開催主旨説明：横浜市立大学 COI-NEXT 副 PL 高瀬堅吉客員教授

基調講演では、山極壽一氏が「思春期の学びとは何か」と題して、自らのゴリラ研究からの人類の進化史と家族の形成を軸に、以下の内容を講演した。①人間の直立二足歩行の弱みを強みに変える戦略は共感力の増加に基づく社会力である。②このため、人類は多産性を獲得し、その授乳期はゴリラに比べて3倍短い。授乳期を終えた赤ちゃんに離乳食を与えなければならず、脳が大きくなった重たい赤ちゃんを育てるために、共同保育という家族を超える共同体が成立した。そして、脳の成長を優先させるために心身の成長のバランスが大きく崩れる思春期スパートという本日のテーマ課題が発生した。③社会の変化について、近代学校制度は19世紀に始まったが、通信革命・情報革命を経て教育の仕組みが異なってきたこと、昨今のSNS普及による情報量や人間とAIの違いが及ぼす課題を指摘した。最後は、大学が求められる研究・社会貢献・教育に必要な柱を、ジャングルでの生活に必要な3つの柱に例えて、資金(光エネルギー)、世論の支持(水)、制度(生態系)とし、大学は多様な学問分野や個性を持つ研究者たちの集まりであるとともに世間と未知をつなぐ窓であり、さらには真実に迫る共創を体験できる場であってほしいと「大学はジャングルだ」論



基調講演：山極壽一・総合地球環境学研究所長

でまとめた。会場からの質疑もあり、ゴリラ社会に学ぶ「ケンカ」や「競争の良し悪し」への見解も述べられた。

講演は、奥村春香氏が「第3の家族の活動から見える若者の今」と題して、自らの経験と現場支援の観点から、どんな家族も生きやすい社会の構築を目的とした「第3の家族」の活動を紹介した。中高生の20%が家庭で生きにくさを感じている現状に対して、児童相談所はその1%しか対応できていない現実があり、社会構造



講演：奥村春香代表

に問題があるとの指摘があった。「寄り添わない支援」webプラットフォームの紹介があり、SNS 上での多くの事例が紹介され、健全なアングラコミュニティ運営の背景および悩みを匿名で明かせる掲示板運営の効果が紹介された。そして、本当の家族が第1なら地域や学校は第2となり、本活動が、「第3の家族」であるとまとめた。会場との質疑応答では、こうした問題は昔から存在し、従来は身近で相談・解消することができたが、現代社会では、社会構造がより複雑になっているため、解決しづらい状況にあるとの解説があった。

2つの講演に続いてパネルディスカッションを行った。横浜市立大学の藤本敦也特任教授がファシリテーターを務め、ウッドデッキメンバーから国際教養大学理事長兼学長のモンテ・カセム氏、アメリカの東海岸からオンラン参加のlonQ, Inc. 相京祐飛氏、株式会社島津製作所副ビジネスユニット長の寺本華奈江氏の3名が、そしてMinds1020Lab プロジェクトリーダー兼横浜市立大学教授の宮崎智之氏、横浜市立大学医学部看護学科学生の鵜飼千夏氏がパネリストとして登壇した。テーマは、「今の若者の生きづらさを考える」で、パネリストのそれぞれの自己紹介に始まり、それぞれの世代・環境に応じた問題意識が提起された。若者がうつ病にかかる前に阻止する必要があること、変わりゆく社会には辛さは常にあること、日本は世界からみれば幸せであることなどが意見として挙げられた。また、アメリカの格差社会における課題や日米の価値観の違い、学生は周囲の目線が気になって渦中にいるほど焦ってしまうなどの状況が説明された。ディスカッションでは、2つのトピック：①今の若者の生きづらさとは？ ②2040年頃の未来の若者の生きづらさとは？ について議論を展開した。①の今の若者の生きづらさとは、先を読めないことにあり、現在も過去も同じではあるが、今はそれが極めて高度・知的になっているとの議論となった。カ



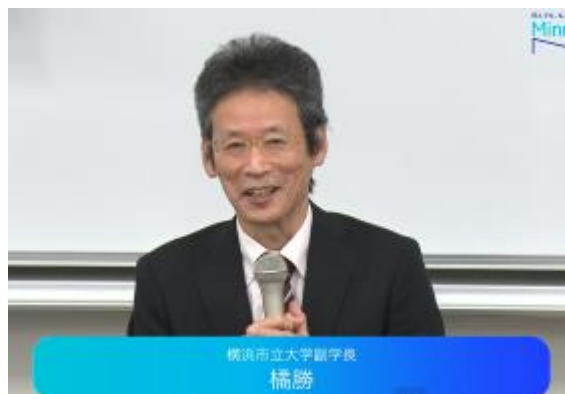
パネル討論の様子

セム氏は、かつての悩みはニーズが非常に単純で「食べ物がない」など分かりやすく共感も得やすかったのに対して、現在はニーズが複雑となり、メタニーズ・高度なニーズになっている。この対策として、国際教養大学が昨今取り組んでいる個人・地域の課題分析の事例が示された。高齢者のニーズを探るには学生を派遣すると効率がよく、理由は、保健婦などの専門家にはなかなか本音を言わないが、自分の孫のような学生には心を開きやすいという事実が判ったとの説明があった。このような見えない障壁には、若者の生きづらさとの共通点があると指摘した。宮崎氏は、社会課題としてフードロスやエネルギー問題があるが、若者の課題はなぜかパーソナライズにいくことを指摘した。ここで来場したウッドデッキメンバーでもある近藤誠一元文化庁長官は、今回のテーマである「生きづらい」との指摘は極めて重いと指摘した。現職の学長(国際ファッション専門職大学)の立場から、Z世代の学生のヒアリングを元にその原因と対策を述べた。失われた平成の30年から判ることは、日本の産業界の新陳代謝は低いことであり、この大人たちが作った「出るくいは打たれる」社会の仕組みを改めて、オリンピックの金メダル選手を育てるように「出るくいを育てる」社会に変えていくことが重要だとまとめた。

②の2040年頃の未来の若者の生きづらさについては、Minds1020Labの研究として、生きづらさの原因を特定して環境を変えるという考えもあるが、環境を変えてもまた新しい課題がでてくるだろうと結論し、変わる条件にどう対応するかを研究する方針としていることが説明された。相京氏は、例えば、若者は3Dゲームを使いこなし、ビジネスにも応用ができるような多様性への対応の準備はできているのに、新たな活動への法整備が追いついていないギャップがあることを指摘した。宮崎氏は、未来への対策は、「帰属」と「情報」と「努力」の3点にあり、労働時間制約のために貴重な経験ができないなど、むしろ逆効果となる国の規制について、もっと幅のある選択肢を与えるべきであると言及した。寺本氏は「幸福論」から“悲観は気分、楽観は意思”を引用し、理想の姿をイメージしながら自分の意志で楽観主義に立つことが大切なのではないかとまとめた。最後に会場との質疑では、参加最年少の高校生から、自分たちの世代にどう引き継ぐかをアドバイスしてほしいと要望があり、宮崎氏は、正しい情報の周知と教育が重要であり、この教育は本人だけではなく、保護者や教員を含めて行うことが肝要と述べた。カセム学長は、帰属意識から脱却してチームビルドを行なうことも状況によっては必要であり、社会課題を意識した世

代・学問を超えた協働の「場」作りが大切であるとまとめた。

最後に、横浜市立大学副学長である橘勝氏より「本日の議論より、若者の生きづらさに対して、大学の教育は重要だと感じている。大学は、大勢の若者が集うところであり、その若者の課題・問題意識について本日は多くのヒントをいただいた。本日のコメント・議論を横浜市大の教職員へも展開して対応をしていく。引き続き、皆様のご支援を頂きたい」と閉会挨拶があり、シンポジウムは終了した。



閉会の挨拶：横浜市立大学 橘勝副学長

開催後のアンケートでは、「大変よかった」が 49%、「よかった」が 49%、「やや物足りなかった」が 2%、「物足りなかった」はなしという結果であった。

また、シンポジウムを終えて、オンライン参加した学生より、以下の感想が寄せられた。

①社会構造の変化やテクノロジーの進展が若者に与える影響は、個人の問題ではなく社会全体で取り組むべき課題である。特に、SNS による「理想的な家庭像」の押し付けや過剰な監視文化がもたらす新たな孤立感の可能性は、重要な指摘であった。

②SNS の普及により、多くの若者が複数の SNS を利用し、サイバー空間でのコミュニティが当たり前となる現代において、若者は自身と異なる考え方を多く目にすることができる。しかし、これに伴い SNS から起因する問題や犯罪も増加している。最近では、オーストラリア政府で 16 歳未満の SNS を禁止する法案が提出されており、SNS の問題は世界中で深刻視されている。山極氏が述べるように、「人と繋がり、発想し、試行することで新しいものを創造していく」共創力を高めるためには、SNS を有効に利用することが必要である。今回のシンポジウムにおいても、YouTube という SNS を通じて、私たちは異なる視点の考え方を学ぶことができた。今回はオンライン参加者を巻き込んだ活発な意見交換は行われなかったものの、若者はお互いの意見や感じ方を尊重しながら、引き

続き SNS を活用し、多様な意見に触れながら共創力を高めることが重要である
と考える。

③生きる力が未熟なまま選択肢の多さに直面する場合の解決策としては、大人が受動的に介入すべきである。若者が行動しやすい場を提供し、各人の考えを共有できるコミュニティを作り出し、若者がどう生きたいかを明確にし、その自信を生み出す必要がある。



会場の様子



集合写真